

教育史から見た経済史・経営史辞典 （発表要旨）

滝内大三

はじめに

近世から近代初頭にかけて、庶民の子どもたちを対象に「読み書きそろばん」を教える教育機関が日本の社会には、多数存在した。その背景に、江戸時代の商業資本の活動と産業の発展があつたことはよく知られている。そのため本庄栄治郎編『日本経済史辞典』は「寺子屋」の項目を立て、教育問題への目配りを怠っていない。これを受け継ぐ『経済史・経営史辞典』が、近代産業社会に果たした教育の役割を取り上げようとするのは至当であろう。その項目として、何を取り上げるべきであろうか。

私は、キャリア形成の今日的課題を見据える観点から、

「実業補習学校」にスポットを当ててみることを提言したい。それは、産業社会の人材育成のあり方が、徒弟制度から学校教育へと変化する中で生じた人間形成の諸問題を浮き彫りにしているからである。

（一）

明治の学校教育がスタートした一八七二（明治五）年の「学制」において、「実業教育」の柱はなかった。明治政府は国民に対する「初等教育（普通教育）」の普及と、日本社会を指導する少数エリートのための「中等教育」「高等教育（専門教育）」を念頭に置いて学校制度を構想したが、農工商業を支える実務家の育成計画は持たず、それは学校

(文部省) 外の組織に任されていた。

(二)

しかし一八九〇年代に入り、伝統工業の近代化を進める必要が自覚されるようになると、従来の徒弟や年季奉公、見習制度に代わる学校の設立が模索されるようになった。

そして、実務に従事しながら夜間学校に通う教育制度が導入された(一八九三年「実業補習学校規程」)。徒弟制度の良さを残しながら科学技術の知識を与えようという試みは、「会津漆器徒弟学校」や「瀬戸陶器学校」のような伝統工業に立脚する学校と、「東京府職工学校」「広島職工学校」のような近代工業への職工供給を目的とする学校を生み出した。そこで発展を遂げたのは後者であり、日本の重化学工業化に適応した「徒弟学校」は「工業学校」へと上昇し、前者は廃校の憂き目を見ることになった(一八九九年「実業学校令」)。

(三)

これは一面において産業技術の発展が、特殊な熟練や精神的な能力より、一般的な労働特性と科学的基礎教育を要求したことの反映であるが、同時にそれは、徒弟制度が持つていた「しつけ」と人間形成の機能を家庭と地域社会に返

すことを意味した。しかし宿題や受験勉強といった学校の下請け機能を持たされた都市の賃金労働者家庭においては、地域性を踏まえた人間形成の役割を十分果たせない結果を招くことになった。

むろん、徒弟制度の持つ擬制的親子関係の消滅は、主従的な隷属関係のくびきから子どもたちを解放することにもなり、生徒の進路の可能性を広げた点も見ておかねばならない。それはまた、国民の職業移動や上昇志向を刺激することにもなり、初等教育の範疇から抜け出せないで職業選択の幅を狭めている「徒弟学校」の不評の要因ともなった。

(四)

一方、中心機能としての職業技能訓練は、徒弟制度の解体や「徒弟学校」の不振と共に工場内に戻され、「見習職工制度」に再編された。これは子飼いの職工を企業内で自家養成する仕組みとなり、戦後の企業内教育(OJT)へと発展していった。このメカニズムは、企業への帰属意識を強め、「企業戦士」の養成にプラスとなった。企業の枠を超えてヨコに広がる「個」の力よりも、タテ関係の中で強固になるチームワークを重視する姿勢は、学校の「正

課」の成績より「課外」のクラブ活動の経験を重視するという採用人事のあり方にまで影響を及ぼした。

(五)

商業・工業の「実業補習学校」が「実業学校」に上昇していく中で、農業だけは「実業補習学校」を爆発的に増加させた。一九一七年の調査で農業補習学校は八五八〇校、一九三三年に至って一二一六〇校に増加している（工業補習学校は逆に二三三校から九八校に減じている）。これは何を意味するのであろうか。

農村が必要としていたのは、「職業選択の自由」を保証する学校ではなく、親の跡を継いで農業に従事する人間を育ててくれる学校であった。地域の実情に合った農業技術を改良する知性と、地域社会のために献身的に努力する倫理性をはぐくむことが、こうした学校に求められた。その中には、「正直」「勤勉」「忍耐」「協調性」といった（日本人の美德と呼ばれた）資質と共に、村の仲間をまとめていくリーダーシップが含まれる。これらの資質は、農業の専門学校によってではなく、農村というフィールドの中で行われるOJTによって可能だったといえよう。農業補習学校は生産現場と教育を直結することによって、その訓育的

役割を強め、地域社会の支持を得たといえないであろうか。むしろこの学校が果たした政治的役割については、別途検討する必要がある。

おわりに

工業化の進展は、子どもたちが学校の階梯を駆け上がって社会に出るシステムを作った。それは汎用度の高い学力形成に貢献したが、その学力を支える目的意識を抽象化させ、学習意欲を弱める働きもした。塀によって社会から囲い込まれた学校の中だけの教育は、社会への関心を高める中で進路を切り開きつけかけを与えにくくした。それは結局、「ニート」などの問題に跳ね返り、産業界への人材供給機能に支障をもたらしたのでないだろうか。そうした意味で、経済史・経営史の側面から「日本の近代化」と「人間形成」の関係を問い直すことは大きな意義があると思われる。

（たきうち だいぞう・大阪経済大学人間科学部教授）